大會抄錄

西晉・十六國時代における河西地方の動向と特質
——敦煌墓からみた——

井上德子

五胡十六國時代、河西地方には前涼、後涼、南涼、西涼、北涼のいわゆる五涼が出現し、それらが互いに霸を競った。これらの五涼政權には在地の豪族勢力が參畫しているとされ、何らかの手段で爲政者の地位を獲得した者を、河西豪族がバックアップするという圖式が想定されてきた。しかし、五涼政權のすべてがこの構造を持つわけではなく、また史料にみえる爲政者側の河西地方に對する意識、河西人士の政權に對する意識も一樣でない。このようななかで、河西人士の支持を受けた政權において、「河西地方は統一されなければならない」という意識が絕えず前面に出ることは注目に値する。實際、地理的な要因からも、この地域を一つの纏まったものとして扱いがちである。

しかし、一方で、西晉から十六國時代の墓葬の發掘報告を分析していくと、河西地方內の武威、敦煌などの諸地域の間には共通性よりむしろ、異質性が際立っており、この異質性は、諸地域の社會の特質とは不可分なものと考えられる。報告では、從來知られていた敦煌縣城の東に廣がる新店臺・義園灣・佛爺廟の古墓群に加えて、一九九四年に報告書が公刊された縣城西側に廣がる祁家灣の古墓群の分析に觸れつつ、この時期の河西地方の統一性と非統一性について檢討を加えたい。この檢討が五涼政權の性格を把握する上での一助となると考えるからである。

宋代の監司と地方官監察

青木敦

帝政時代中國の地方行政組織の變化を、人口增や地方社會の活力の上昇に伴う、地方化の傾向として捉える見方が存在する。その一つの根據は、省に代表される、廣域地方行政の確立である。

宋代には、路という地方區分に、監司等の機關が常置された。しかし、この監司の意味や機能についての從來の認識は不十分である。たとえば宋人にとって監察は〝地方官（州縣官）—監司〟、〝中央官—臺諫（御史・諫官）〟という型が理想であり、これまでの研究でもこれを實態として考えがちであった。ところが『宋會要』「黜降官」の事例の統計などでは州縣官の不法行爲等も約半數は臺諫によって監察（彈劾）されており、人事面での監司の働きは甚だ不充分であった。この理想と現實とのズレについて南宋朝では樣々な議論が行われており、そこからは既に當時の地方の諸問題が、御史職を帶びない監司ではなく、直接中央の御史にもたらされることが多かった狀況が見て取れる。監司制度の機能不全の一因は、明らかに中央政治ではなく地方政治の側に存在した。また州縣官の監察を御史から監司に一元化しようとする政策も幾つか行われた。冒頭